Catharina Raudvere & Leif Stenberg (eds.),
Sufism Today: Heritage and Tradition in the Global Community

London & New York: I. B. Tauris, 2009, ix + 259 pp.

西 山 愛 実^{*}
 NISHIYAMA Manami

本書は、2005年から2007年にかけて行われた、コペンハーゲン大学とルンド大学の共同プロジェクト“Exile and Tradition: Transnational Contemporary Sufism (追放と伝統：国家を越える現代のスーフィズム)”の研究報告をまとめた、現代スーフィズムに関する論文集である。両大学を中心とした、各国の研究機関に所属する13名の研究者による13の論文が収載されている。以下ではまず、本書の問題関心がうまれた経緯を明らかにすべく、1990年代以降の現代スーフィズム研究に簡単に触れる。次に、本書に収載された各論文を紹介する。その後、スーフィズム研究史上における本書の意義を検討し、最後に、本書の問題点を通じて、現代スーフィズム研究が抱える課題のひとつを提示する⁽¹⁾。

タリーカ（スーフィー教団⁽²⁾）研究の大家であるトリミングムは、1971年の著書で、近代におけるタリーカの周縁化を論じている（Trimingham 1971, 257）。当時としては有力であったと思われるこの見解は、しかし、徐々に再考を求められるようになる。ル・ガールが指摘するように（Le Gall 2010, 683）、それは、1990年代後半から、ホフマンやエルンストラの研究を先駆とする（Hoffman 1995; Ernst & Lawrence 2002 他）、現代におけるスーフィズム実践に関する研究によって培われていった。ここ近年の研究の特徴としては、対象地域の拡大が挙げられる。なかでも近現代の経済変化、ソ連崩壊などに伴って生じた大量のムスリム移民に注目し、彼らの移住先である欧米を対象とする研究が見られるようになった。そして、移住先で実践されるスーフィズムの適合性や多様性が明らかにされ、それぞれの地域におけるスーフィズムの現代的展開が議論されている（Malik & Hinnells 2006; Bruinessen & Howell 2007 他）。

このような流れを受けて、本書は世界各地のスーフィズムの実践を取り上げ、その可能性を説く。そのなかで本書に特徴的なのは、今まで取り上げられることの少なかったバルカンや北欧などの地域に注目する論稿を有する点、移住先と故郷の両方、あるいは移住先での複数の活動を比較・考察するものが多い点である。それでは、各論文の内容

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程
 Ph. D. Student, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

を順番に見ていく（番号は評者が便宜的に付したものである）。

①地域を越える流動性と伝統的権威：ムスリムの日常生活の諸相としてのスーフィズムの実践と言説（Catharina Raudvere & Leif Stenberg）

本書の序論の役割を果たすのが、編者2名による本論文である。本章では、ムスリムの日常に着目した論集（Bowen & Early 1993）を踏襲する、本プロジェクトの性格や目的、イスラーム研究の潮流に即したスーフィズム研究の動向と問題点が提示される。イスラーム研究が理論から現実の事象へとその視野を広げていったように、今日のスーフィズム研究においても、日常において実践される儀式、諸活動に注目することこそが重要であると説く。さらに、近現代のムスリムの移住などに伴う「流動性」が、今後の研究において鍵となることが述べられている。

②スーフィズムの政治活動：それは存在するのか？（Paul L. Heck）

本章では、スーフィズムの倫理を説く政治指導者の活動と言説の分析により、スーフィズムと政治活動の関係が検討される。ナクシュバンディー教団のシャイフ、アフマド・クフターローに師事していたハバシュと、ブードシーシー教団に所属していたヤースィーンは、それぞれシリアとモロッコで、議会参加や君主制反対運動を行っている。両者は、宗教と政治に関する見解や活動内容において差異を見せているものの、現代社会とイスラームの調和を目的とする点、スーフィズムの倫理を共有する点では一致しているという。以上の詳細な分析に基づき、筆者は、政治的と見られる彼らの活動を、単なる政治活動としてではなく、スーフィズムの実践の一手段として捉えるという視点を提示している。

③個人的・宗教的アイデンティティの越境：ムハンマド・サイード・ラマダーン・ブーティーによるE・ハーニーの『メム・ズィーン』翻案（Andreas Christmann）

本章は、トルコ共和国建国（1923年）前後にアナトリアからシリアに移住したクルド人のアラブ化と、その宗教的アイデンティティの事例として、宗教知識人として成功を収めたラマダーン・ブーティーとその執筆活動について論じる。著者は、クルド文学が公的に禁止されるバサ党政権以前に出版されたブーティーのスーフィズム叙事詩翻案の再評価を行い、その後の執筆活動の変遷と比較・考察しながら、彼がアラブ化していくことで周囲の評価を得ていった過程を明らかにする。

④故郷と故郷の狭間で：ボスニア・ヘルツェゴヴィナとスウェーデンのボシュニャク系移民のあいだにおけるスーフィズムの遺産に対する認識（Catharina Raudvere）

この論文は、スウェーデンに住むボシュニャク系移民のスーフィズム伝統の認識とタリカや他のスーフィズム系組織の活動、その背景を考察することで、欧州におけるム

スリムの宗教実践を検討する。筆者は、ボシュニャク系移民のあいだで、オスマン帝国期から継承されたスーフィズムの伝統や、共産主義時代における抑圧の影響を受けた従来のタリーカ、そして1980年代のイスラーム復興に伴い、スウェーデンに流入したトルコ系のスーフィズム関連組織が併存していることを指摘する。その上で、移民である彼らにとって、スーフィズムがスウェーデンのボシュニャク人としてのアイデンティティ構築において重要な役割を果たしていると同時に、伝統文化に対する忠誠と帰属の表現方法となっていることを論じる。

⑤ イギリスにおけるナクシュバンディー・タリーカの連続性と変容：聖廟 (*mazar*) と宗教学校 (*dar-al-ulum*) との関係の変化を再考する (Ron Geaves)

本章は、南アジア系移民の多いイギリス中部の工業都市コベントリーにおける、ナクシュバンディー・タリーカのバレールヴィー派の活動を扱う。彼らの教義、宗教実践、聖廟と宗教学校の機能の変容に注目しながら、異郷におけるスーフィーのカリスマ的権威の諸相を考察する。そして、伝統的な信仰生活を重視する移民第一世代と、イギリス社会への適合を志向する若い世代のあいだで葛藤が生じている状況を明らかにする。筆者は、伝統と革新という問題への取り組みが今後のタリーカの発展につながるとの観点から、若いシャイフに指導力が求められている現状を指摘する。

⑥ 地域を越えるスーフィーの運動：ロンドンのナクシュバンディー・ハッカーニーに見られる発展 (Simon Stjernholm)

本章は、北キプロスでトルコ系住民が設立したナクシュバンディー・ハッカーニーと呼ばれる教団組織の、イギリスにおける活動に注目する。特に、その活動地域の広範さ、公的なイスラーム系組織との交流、政府との友好関係構築への試み、ポップミュージック等を使用した新しい伝道方法が考察される。また、初代シャイフと副指導者であるハリーファの活動の差異を指摘し、シャイフ位継承や指導者と弟子の関係を扱うことで、彼らにとってのシャイフの存在意義を検討する。霊性面の育成を重んじ、非ムスリムへも門戸を開く本組織の事例より、欧州における新しいスーフィズムの可能性を示唆する。

⑦ 一方の足はイスラームに根差し、もう一方の足は世界をめぐる：トルコのスーフィー・ジェマート (*cemaat*) における伝統と社会参加 (Heiko Henkel)

トルコのナクシュバンディー教団の中で最も有力な支部の一つである、イスケンデルパシャ・ジェマートを考察対象とする。一般にタリーカと見なされる同教団の系統をひきながら、ジェマート (トルコ語で「集団」の意) と称される特殊な本事例を取り上げることで、タリーカとは異なるスーフィズムの実践の新たな形態を明示し、このことがイスラームの更なる可能性につながることを検討する。公権力への働きかけや、世界規模での経済活動の展開は、彼らにとってのスーフィズムの伝統を歪曲するものではなく、

それを継承する新しい共同体の形成過程であることが論じられる。

⑧スーフィズムの伝統の構築における創造性と不変性：シリアのアレッポにおけるカーディリー・タリーカ (Paulo G. Pinto)

本章は、カーディリー・タリーカの系譜を引く二つの支部を比較分析し、スーフィズムの伝統が継承される過程を考察する。シリアのアレッポにある各支部の修道場（ザーウィヤ）組織は、前代から引き継いだ基本的な教義や儀式を共有しながらも、神秘体験の実践や組織内での階層のあり方、宗教的用語の解釈に差異を見せているという。著者はその要因が、それらの組織が系譜の継承により正統性を示していること、神秘的な力や秘儀に優位性や独自性を打ち出していることにあるとして、タリーカを構成するスーフィズムの伝統を理解するために、その実践に見られる創造性と不変性の両方に注目する必要があることを指摘している。

⑨聖なる空間、儀式そして実践：サイイド・ピール・ワーリス・シャーとシャー・アブドゥッラティーフ・ビターイーの聖廟 (*mazar*) (Uzma Rehman)

パキスタンのパンジャブ地方に位置する二つの聖廟を考察対象とする。特に、ロジャー・バラードが同地域の宗教理解のために提唱した、パンスィック（ヒンドゥー、スィーク、ムスリムが融合した宗教実践の範囲）、ダルミク（自然の秩序、法）、キスメティック（神の定めた運命）の概念に着目しながら、参詣者や地域住民にとっての聖廟の役割とその意味を検討する。対象である2つの聖廟の、祈りの場という精神的な役割だけでなく、本来であれば多大な金銭的負担を強いられる結婚の仲介や、食事の提供、聖者祭での出店による収入源などとしての機能が紹介される。参詣者の多くが貧困層であることを指摘し、本地域における聖廟の、人々の地位や生活を向上させる場としての社会的、経済的意義を明らかにしている。

⑩ウェブ上におけるスーフィズムとの遭遇：アメリカ合衆国における2つのハルヴェティー・ジェッラーヒーの道と伝道活動 (Margaret J. Rausch)

トルコ系のハルヴェティー・ジェッラーヒーと呼ばれる教団組織の、ニューヨークを拠点にした2つの支部を比較考察し、アメリカにおけるスーフィズムの実践、スーフィズム伝統の継承過程を論じる。それぞれの組織の儀式や構造、言説に加え、ウェブサイトで公開している情報を分析することで、スーフィー教団の活動におけるインターネットのあり方を検討する。それらの分析から、両組織が前代の教えを継承しつつ、シャリーアの遵守や個人主義、性や階層制に対して異なる解釈を行っていることを明らかにし、非ムスリムをも動員する、移民先でのスーフィズムの多様性を論じている。

⑪アメリカ合衆国におけるスーフィズム：混合 (creolisation)、混成 (hybridisation)、融合 (syncretisation) ? (Oluf Schönbeck)

これまでになされたアメリカのスーフィズム関連組織の分類方法をまとめ、実際の例に適用させることで、スーフィズム研究で用いられる概念の問い直しを行う論文である。結論では、アメリカに存在する諸組織の事例より、スーフィーやスーフィズムといった用語が様々な状況で使用されていることが確認され、スーフィズムをイスラーム神秘主義と解釈する従来の捉え方や、混合、混成、融合といった、研究者によって提示されてきた専門用語の安易な使用へ注意が喚起される。加えて、スーフィズムの定義という問題が、イスラーム概念全体の問題へとつながることを指摘し、アメリカにおけるイスラームへの偏見、それに反対する運動、イスラーム系組織に関する情報を紹介する。そして、各地で発生している反イスラーム感情を是正する方法としてのスーフィズム研究の可能性を説いている。

⑫ 調和への戦略：ヨーロッパの環境におけるブルハーニー・タリーカの変容 (Søren Christian Lassen)

スーダンを中心とし、ヨーロッパ、特にドイツで活動を展開しているブルハーニー・タリーカの移住先への適合の諸相を、儀式や聖者祭より分析する。筆者は、スーダン本部が宗教的指導や権威を保つ一方、ドイツ支部が実質的な活動の担い手となっていることを指摘し、両者の相互関係を論じる。そして、次世代への継承によりこの均衡が崩れることを予測し、今後の更なる変化を示唆する。また、同組織と、ドイツのムスリムの中で多数派を占めるトルコ系移民との関わりが希薄であることを指摘し、民族を越えるスーフィズムのあり方や拡大の方法に関する更なる研究の必要性を明示している。

⑬ スーフィズムを文脈に当てはめる：ドイツにおけるメヴレヴィーの伝統 (Gritt Klinkhammer)

本章は、ヨーロッパにおいてどのようにメヴレヴィー・スーフィズムの伝統が継承されているかを、ドイツの事例より考察する。筆者は、ルーミーの神秘詩を詠むコンサート、治癒行為としてのセマーや勉強会などの実践を紹介し、それらの活動が、地域に適合した新しい宗教市場の拡大をもたらし得るものであると論じる。そして、それらの動きをイスラームの価値体系に組み込まれないものと評価し、ドイツの世俗化に逆らう動きとは言えないことを指摘する。一方で、イスラームの価値の下に実践される伝統的なスーフィー教団の実態と、関連組織の性質の差異を明らかにし、メヴレヴィーの伝統文化の流入や発展の多様性を検討している。

以下では本書の意義と問題点について見ていきたい。①で示されるように、本書の意義は、様々な地域のスーフィズムの実践を具体的な事例とともに紹介し、今日のスーフィズムの多様性を論じている点にある。先行研究では移民先での活動の紹介、移民先と

祖国における実践の比較にとどまるものが多かったのに対し、④、⑤、⑩、⑬に見られるように、本書では、移民先における複数の運動や、過去の様相と比較考察を行う。そして、国外でのスーフィズムのあり方も決して一様ではなく、移民先の環境という要因がスーフィズムにどのような影響をもたらすのかを明らかにする。加えて、スーフィズムの適合性を立証するだけにとどまらず、スーフィズムの伝統にも目を向けながら、どちらかに偏重することなく、それらのせめぎ合いの中で新たなスーフィズム像を描こうとした本書の意義は、現代のスーフィズム研究として評価されるべきであろう。ただし、このような意義は、一方で本書が対象とするスーフィズムそれ自体をより漠然とさせてしまっているようにも思われる。

それは、本書の各章で取り上げられる対象が多岐にわたるという点に起因している。多様な対象を扱うことそれ自体は問題ではない。しかしながら、それらを表現するための用語法が問題となってくるのである。そこで、スーフィズムの下に活動する集団や組織が本書においてどのように表現されているか、その用語法を見てみたい。各章の題名に反映されるように、本書では、典型的な *tariqa* や *order* に加え、*networks* (p.13) や *brotherhood* (p.103 他) といった表現が併存している。また、⑥のように、*tariqa* や *order* といった用語の使用を避け、原語に即した表現をより優先的に使用する例も存在する (p.83 他)。

このように多様な表現方法を用いることは、スーフィズムの下に活動する集団を、従来のタリーカという一つの枠に当てはめずに、より広く捉えることにつながるだろう。しかしながら、これらの用語は明確な説明がないままに使用されることが多く、他の章における用法との不統一が更に混乱を引き起こすという事態が一部に見られるのである。例えば、*Sufi brotherhoods* という用語は、⑬においては *Mevlevi tariqa* (*Sufi brotherhood*) と表記され (p.210)、タリーカと互換性のある用語として使用される一方、⑦では、タリーカと区別されるというジェマートを指す際にも用いられている (p.110)。その多様性ゆえに、スーフィズムに関連する組織に明確な定義を行うことは、現在のところ困難であるようにも思われる。しかしながら、各対象の分析を適切に行い、スーフィズムという概念をより詳細に検討していくために、少なくとも個々の研究において基本的な用語の説明をして欲しかったように評者は思う。

以上の点を差し引いたとしても、「移民」や「伝統と革新」といった現代スーフィズムが直面する諸問題に焦点を当て、実証的な研究を行う本書の価値は明白である。世界各地のスーフィズムに関する様々な現象を扱う本書は、紛れもなく今日のスーフィズムの一端を写す研究である。聖廟参詣やムスリム移民によるイスラーム運動、タリーカに関心を持つ人にとっては、一度は目を通す必要のある書物である。

参考文献

- Bowen, D. L. & E. A. Early 1993 : *Everyday Life in the Muslim Middle East*, Bloomington : Indiana University Press.
- Bruinessen, M. van & J. D. Howell (eds.) 2007 : *Sufism and the 'Modern' in Islam*, London & New York : I. B. Tauris.
- Ernst, C. W. & B. B. Lawrence 2002 : *Sufi Martyrs of Love: The Chishti Order in South Asia and Beyond*, New York : Palgrave Macmillan.
- Hoffman, V. J. 1995 : *Sufism, Mystics, and Saints in Modern Egypt*, Columbia : University of South Carolina Press.
- Le Gall, D. 2010 : "Recent Thinking on Sufis and Saints in the Lives of Muslim Societies, Past and Present," *International Journal of Middle East Studies* 42, 673-687.
- Malik, J. & J. Hinnells (eds.) 2006 : *Sufism in the West*, London : Routledge.
- Trimingham, J. S. 1971 : *The Sufi Orders in Islam*, Oxford & New York : Oxford University Press.

注

- (1) 本稿における現代スーフィズム研究とは、1980年代から現在までを視野に入れた、スーフィズムの名の下、及びその周辺で観察された事象を対象とする研究を指す。
- (2) 本稿ではスーフィー教団を「タリーカ」の語に統一した。ただし、本書の原文において (Sufi) order と記述されている場合は、(スーフィー) 教団と表記した。